

言語文化 読むこと

5時間扱い

単元の目標

「児のそら寝」「児の知恵」

- 物語の展開を理解し、適した形式で解釈することができる。
- 古文を読むために役立つ文語の決まりを習得する。

評価規準

知識・技能	伝統的な言語文化(ウ) 古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語のきまりや訓読のきまり、古文特有の表現について理解すること。
思考・判断・表現	読むこと(ア) 文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えること。
主体的に学習に取り組む態度	古典の世界に親しむために、古典を読むための基礎的なルールを身につけながら物語の展開を理解し、さらにそれを課された形式に応じた構成へとの確に表現しようとしている。
知識・技能	音読のリズム、歴史的仮名遣いや漢字の読みなどに慣れながら、適切なテンポや流暢さでよどみなく読むことができる。
思考・判断・表現	物語の展開を理解したうえで、さらに登場人物の細やかな心情に留意しながら、課された形式に応じた表現物を作成することができる。

単元の流れ

次	時	主な学習活動
一	1	宇治拾遺物語「児のそら寝」を音読し、大まかな話の筋を理解する。
	2	「児のそら寝」の登場人物の心情や思惑を解釈する。
二	3	前時の解釈をもとに四コマ漫画を作成し、共有する。
三	1	沙石集「児の知恵」を音読し、大まかな話の筋を理解する。
	2	「児の知恵」の「面白さ」について論述する。

授業づくりのポイント

単元で育てたい資質能力

本単元のねらいは二つある。一つは、説話を通じて、古典仮名遣いや品詞など、これからの読解の土台となる学習をすることと、もう一つは解釈した物語を、四コマ漫画という制限が設定された形式や、文字数制限された論述形式で表現することで、適切に読む力を育むことである。多くの生徒にとって、高校入学後初めての古文作品となる可能性が高い本教材を通して、古典に親しむ良き契機としたい。

具体例

多くの教科書に掲載され、詳細な注釈や現代語訳も付記されているはずなので、物語の大筋自体は理解にかたくない。しかし、児の行動の意図(なぜ「わろかりなむ」なのか)や、僧たちの思惑(児がうそ寝をしているのに気づいているか否か)といった細やかな解釈を2時目に生徒とのやりとりの中で気づかせていきたい。

教材・素材の特徴

「児のそら寝」は「宇治拾遺物語」に、「児の知恵」は「沙石集」に収録されている説話である。展開自体には難解な部分はなく、子どもにも分かりやすい話となっている。そのため、教師主導の解釈ではなく、展開を一問一答でテンポ良く読み込んでいくなどの工夫が求められる。また、主要人物である「児」の心情や思惑などが明記されており、行動の理由を文中に求めやすいという性質も教材として魅力的である。それを取り巻く登場人物たちの人物像にも留意させたい。

具体例

「児のそら寝」の中には「確述用法」や「逆接用法」などが用いられている。そのため、逐次訳では授業のリズムが損なわれる可能性が高いので注意が必要である。また、文法解釈の入り口として「已然形+ば」(この時点では「ば」だけに注目させる)が因果関係を表す目印であることを示すことも効果的であろう。

言語活動の工夫

四コマ漫画の持つ「起承転結」のフォーマットで表現させる場合、作品中のどの場面を「転」に持ってくるかが評価の基準となる。模範解答でいえば、「をなさき人は寝入りたまひにけり」「あなわびし」の部分を盛り込むことが想定される。

「児の知恵」は、作品の面白さについての論述となるが、どの表現を取り上げて、どのような面白さを掘り起こすかということが評価の基準となるだろう。古文作品を授業で取り扱う場合、どうしても物語の展開を理解するというのが主眼となってしまいがちで、生徒の次の活動に活かさない。

物語の表面的な展開を理解した後にはどうするか、ということが単元構成を考えるうえで肝要となる。

本時の目標

- ①歴史的仮名遣いに着目し、正しい音読をすることができる。
- ②注釈などを参考にしながら、自らで話の大意をつかむことができる。

授業の流れ

1 範読を踏まえて、音読活動をさせる(20分)

ケース①
T : 歴史的仮名遣いの読み方について確認しましょう。

- ①語中の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は原則「ワ・イ・ウ・エ・オ」と読む。
- ②「ゐ・ゑ・を」を「イ・エ・オ」と読む。
- ③「ぢ・づ」は 現代仮名遣いで「ジ・ズ」で読む。
- ④「くわ・ぐわ」は「カ・ガ」で読む。
- ⑤ 促音や拗音で読む場合は「つ・や・よ」は「っ・ゃ・ょ」で読む。
- ⑥「らむ・けむ・なむ」などの「む」は「ン」で読む。
- ⑦ 母音が連続して長く伸ばす音は次のように読む。
 - (1)「アウ」→「オー」
 - (2)「イウ」→「ユー」
 - (3)「エウ」→「ヨー」

実際にドリルプリントを使って歴史的仮名遣いを確認する。
特に⑦は[au][iu][eu]とローマ字表記で説明したほうがわかりやすい。

ケース②
T : なるべく先生の読むスピードやテンポに合わせてみましょう。

- ①ゆっくりと読むのではなく、メリハリをつけて読む。
- ②品詞が分類できるように、文節の切る部分を意識づけさせる。
- ③1回目範読 2回目追読 3回目ペア読み と繰り返し音読させる。

「かひもちひせむ」や「寝ざらむも、わろかりなむと思ひて」など、初めて音読するには言葉の切るポイントがわかりづらい部分も多くあるので、教師側は、留意させたい部分を意識的に二度読みしたりさせたり、工夫をしながら生徒が古文のリズムとテンポになじむようにする必要がある。

2

古文の特性について留意させた後、ペア学習で話の大意をつかませる。(20分)

ケース①
T : 古文ってどんなイメージを持っていますか？
S1: めんどくさくて、難しそう。
T : そう思われがちなんですよね。でも実は物語としてみると、そんなに波のある展開というのはないんですよ。じゃあどうして難しく見えるのかということ

- ①自分になじみのない言葉、古文単語が混ざっている。
- ②結局何が言いたいのかわからない心情表現が、漫然と続く。
- ③主語が誰だかわからない述語が連続している。

今回取り扱う説話だと、②はほぼありません。
学年をおって登場する「物語」、宮廷ものだと、②と③は非常に難解に見えます。
しかし繰り返しですが、波のある展開は、古文の問題文としては設定されません。

今回の説話は特に、「主語が誰なのか？」ということに注目してみましょう。
登場人物として、誰が登場しましたか？

S1: 児、僧たち
T : じゃあ主語はどちらかになりますね。『人の名前が出てきて「、」』は古文では定番の表記なので、今のうちに慣れておきましょう。今さっき音読でペア読みした人ともう一度組んで、二人でこの話のだいたいのあるすじをつかみましょう。

ペア学習自体は10分ぐらい。大体のペアが黙り始めたら活動を止める。

T : それでは二組ぐらいにあらすじを教えてくださいましょう。

0

「文学的作品」を読む価値づけを伝える。

我々が知っている「昔話」が、実は古文作品に端を発するということは往々にしてある。「竹取物語」=「かぐや姫」はもちろん、「浦島太郎」も室町時代に成立した「御伽草子」、さらに古くは「日本書紀」などにも記述が残っている。今回取り上げる「児のそら寝」や、「児の知恵」も、これが元ネタになって、幼いころにみた「一休さん」や「マンガ日本昔話」に似たような話を見たことがあるかも知れない。

物語というものは、数百年、数千年を超えてもなお、読む人の感情を刺激する力があるものなのだとすることを、古文の学習初期に伝えておくことは、「なぜ古典を読むのか」ということの、一つの答えともなりえる。国語教師は、文学的作品を読むことの価値づけを、繰り返し授業の中で伝えていく必要がある。それは説教じみたようにではなく、教師本人の感動として伝えられれば十分であろう。

本時の目標

- ①主語や会話主に着目して物語を理解することができる。
- ②行動とその前後を照応し、理由や心情に着目することができる。

授業の流れ

1 接続助詞「ば」を紹介し、その役割について理解させる(20分)

ケース①

T : さて、本文の最後を読んでみましょう。
 S : 「僧たち、わらふことかぎりなし」
 T : どうして僧たちは大笑いをしたんでしょうか？
 S1 : 返事をしたから。
 T : 誰が？
 S2 : 児が。
 T : 返事をしただけで大笑いするんですか？
 S1 : しばらくしてから、返事をしたから。
 T : 文中ではなんと表現されていますか？
 S2 : 無期ののち…？
 T : そうですね。児が呼ばれてしばらくして返事をしたから、ですよ。
 T : そういうふうな、何か原因となって結果何かが起こる。これを、「因果関係」といいます。特に国語の文章を読むうえで、この因果関係をとらえるということは、非常に大事になります。古文ではその大きな目印があります。それが、「ば、」です。

言うまでもなく「ば、」は前にある用言の活用形や文脈によって訳が変わる。しかしこの時点において大事なことは、接続助詞(この名称も今はあまり関係ない)の「ば」が文章の多くにおいて「因果関係」を成立させるということだ。

例えばこれを適用すると、児の「あな わびし」という心情が起こった原因は、その前にある僧の「や、な起こしたてまつりそ…」というセリフであることが分かる。「未然形+ば、」が仮定条件という要素は「ば、」=「因果関係」という構図が定着してから後が望ましい。とにかく文中に「ば、」を見つけたら、前後を確認する。この定着が、正しい古文の読解につながっていく。

会話文を見つけたらすぐに会話主を確認する、という読み方は今のうちに徹底をさせておきたい。1時間目にも取り上げたように、古文を読む際に重要になってくるのは、「主語は誰なのか」という主語意識であり、それは会話文においては会話主は誰か、という意識になる。

2

登場人物の行動や心情に注目させ、文中には明記されていない人物像を読み取る(20分)

ケース①

T : みなさんは中学校のころ、小説を学習した際に「人物像」という言葉を聞きましたか？人物像とは、その人物の外形はもちろん、性格までふくんだ、その人物の特徴を指します。これは古文の世界においても同様で、その人のちょっとした動作やセリフ、心情描写などに表れています。

T : さて、それでは本文のどこでもかまいませんので、児の行動や僧たちの行動から、性格や目的がうかがえる部分を見つけて、その性格や目的について推測してみましょう。

S1 : 「念じて寝たるほどに」っていう部分を選びました。

T : 誰の、どんな性格が推測できるのかな？

S1 : 児の、呼ばれてすぐ返事したくないっていう。

T : なんで返事したくないの？

S1 : うそ寝ってばれたら嫌だな、っていう。

T : それってどういう性格だと判断した？

S1 : …ずるさ？

T : ずるさ、なるほど。同じ場所を選んだ人？ ふーむ、ずるさかあ。

じゃあ児の他の行動で、ずるさが伝わってくる行動ってあったかな？

S2 : 「しいださむを待ちて、寝ざらむも、わろかりなむと思ひて、」

T : どうしてその部分が「ずるさ」なんだろう？

S2 : 起きて待ってるって気まずいから、うそ寝しようっていう…。

T : なるほど、それはS2さんにとっては「ずるさ」なのね。

S2 : だって手伝えばいいのに…(以下つづく)

0

解釈を多様にする視点を与える。

今回の授業の主軸は「児の人物像」であるが、視点を変えると「僧たちが、児のそら寝をわかっていて、あえて起こすな起こすなど言ったのではないか」という見方も成り立たないではない。根拠としては「無期ののち」に返事した児に対して、すぐさま「わらふことかぎりなし」というリアクションをしている。だから僧たちは分かっていて一芝居を打った、児をからかったのだというわけだ。妥当性は置いておいて、生徒たちが、文中にある表現に着目して、根拠をあげながら推測する活動は、文学的作品を読み味わううえでも、非常に大事な出発点になる。生徒が活発に推測・推察・妄想を発言するときには、寄り道をしてでもいいので時間の許す限り取り上げてほしい。それが小説などを取り上げる際の種まきにもなる。

古文・説話
「宇治拾遺物語」
児のそら寝
設問プリント

--	--	--

①印

②印

③印

④印

0. はじめに

□「古文」とは？

「時代から」 「時代までに」

書かれた文を指す

□高校で学ぶ「古文」

「時代か」 「時代がほとんど」

□「古文」のジャンルは大きく4種類

「」 「」 「」 「」

□「古文」を読むときに大事なポイント

①「誰が」しているのか？

○「」をおこなえる

○常に「意識を持つ」

②「どうした」のか？

○「」に注目する

0. はじめに

□「古典的仮名遣い」(歴史的仮名遣い)について

今私たちが使っているのは「

」と「

ルール1

語頭以外の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は「わ・い・う・え・お」で読む

ルール2

ヤ行は「や・い・ゆ・え・よ」「ワ行は「わ・ゐ・う・ゑ・を」

ルール3 長音の法則

ルール4

「くわ・ぐわ」は「か・が」で読む

「ぢ・づ」は「じ・ず」で読む

ルール5

「む」は「ん」で読む

今は昔、比叡ひえの山やまに見みありけり。

僧そうたち、宵よのつねづね、「いざ、かひもちひせむ。」と言いひけるを、

この見、心寄せに聞きけり。

わりとて、し出いせむを待ちて寝ねざらむもわろかりなむと思おもひて、

片方かたかたに寄りて、寝ねたるよしにて、出いで来るのを待ちけるに、

すでにし出いだしたるまゝにて、ひしめき合あひたり。

この見、なだめておぼるかたむずらむと、待ちゐたるに、

僧そうの、「もの申しなぐらはむ。おどろかせたまへ。」と言いふを、

うれしと思おもへども、ただ一度にいら入いむも、

待ちけるかともぞ思おもふとて、いま一声こゝろ呼よばれていら入いむと、

念ねんじて寝ねたるほどに、

「や、な起おしたてまつりそ。をさなき人は、寝ね入りたまひにけり。」

と言いふ声こゝろのしければ、あな、わびしと思おもひて、

いま一度起おせかして、思おもひ寝ねに聞きけば、

ひしひしと、ただ食くひに食くひ音ねのしければ、

すべなくて、無期むぎののちに、「えい。」といら入いたりければ、

僧そうたち笑わらふこと限りなし。

1. 本文を読む

今は昔、比叡の山に見ありけり。

僧たち、宵のつれづれに、「いざ、かひもちひせむ。」と言ひけるを、

この見、心寄せに聞きけり。

かりとて、し出せむを待ちて寝ざらむもわるかりなむと思ひて、

片方に寄りて、寝たるよしにて、出で来るのを待ちけるに、

すでにし出だしたるまゝにて、ひしめき合ひたり。

問1 「2『いざ、かひもちひせむ。』として

①会話主は誰か。【理解】

②口語訳せよ。【解釈】

問2 「5『寝たるよし』として

①行為者は誰か。【理解】

②これと同じ意味の言葉はなにか。

③どうして『寝たるよし』をしたのか。【理由】

重要単語

【1】徒然(つれづれ)なり 暇だ・退屈だ

【2】■せむ ■しよ

【3】かりとて そつは言つても

【4】さま 様子

2. 話の流れを読み解く『児のそら寝』

この児、なだめておどろかねむらずらむと、待ちゐたるに、

僧の、「もの申しなづらはむ。おどろかせたま入。」と言ふを、

うれしとは思へども、ただ一度にいら入むも、

待ちけるかともぞ思ふて、いま一声呼ばれていら入むと、

念じて寝たるほべに、

問3 「2」待ちゐたる『について

①主語は誰か。【理解】 【 】

②何を『待ちゐたる』なのか。【解釈】

【 が を 一と】

問4 「5」念じて寝たる『について

①主語は誰か。【理解】 【 】

②どうして『念じて寝たる』なのか。【理由】

【 から。】

重要単語

【1】なだめて きつと

【2】おどろく 目が覚める・はじと気づく

【3】いらふ 返事をする

【4】念ずる ガマンする

2. 話の流れを読み解く『児のそら寝』

「や、な起」したてまつりそ。をさなき人は、寝入りたまひにけり。」
と言ふ声のしければ、あな、わびしと思ひて、
いま一度起「せか」と、思ひ寝に聞けば、
ひしひしと、ただ食ひに食ふ音のしければ、
すべなくて、無期ののち、「えい。」といら入たりければ、
僧たち笑ふこと限りなし。

問5 「2」あな、わびしと思ひて『こつこつと

①『あな、わびし』は誰が思ったことか。 【 】

②『あな、わびし』を口語訳せよ。 【 】

③なにが『あな、わびし』なのか。 【 】

問6 「6」僧たち笑ふこと限りなし『こつこつと

①どうして『僧たち笑ふこと限りなし』なのか。【理由】

【 】が 【 】から。

重要単語

【1】な ■ ■ そ

■ ■ する な

【2】わびし

ひしひし

【3】すべなくて

じつじつもなくて

【4】無期ののち

こつこつこつこつ